AACK 京都大学学士山岳会 No.3
Newsletter NOV. 1996

梅里雪山学術登山隊出発

八月七日に行われた調印式以後、中国とのいろいろな打ち合せがあったが、十月十七日、先発隊三人（人見五郎、中山茂樹、小林尚礼）が出発し、二十三日徳欽、二十九日BC入りした。続いて斎藤隊長以下八人の本隊および報道隊は、十一月五日、関西空港から出発し、北京経由十六日BC入りをした。シェルパとは十一月八日昆明で合流した。天候がよければ十二月上旬登頂予定。先発からの報告によると、晴れの日が続いているという。あとは無事成功を祈るのみである。

なお募金も会員諸兄姉のご努力により、不況のなかにもかかわらず、ほぼ順調にすすんでいる。

なお登山隊の現地報告は、インターネット：http://www.yomiuri.co.jpで見ることができます。

私はなぜAACKに入らなかったのか

表記の問題に対して手がかりを知りたいと思って、最近十年の山岳部出身者でAACKに入会していない人を対象にアンケートをとりました。質問に対する回答だけでなく、貴重な意見をよせられましたので、あわせてその結果を報告いたします。

アンケートの文面とその回答（括弧内に示す）は次頁の通りです（平井一正）

なお次のような意見が添えられている。

A君

「目立つがルート的には難度の低い山の初登頂が得意（岩と雪一六八）」。過去にはパイオニアワークの先駆者として、尊敬に値する登山をしていたと思う。しかし現在ヒマラヤにおけるパイオニアワークはより困難なバリエーションでのソロ・初登である。ヒマラヤの大岩峰もフリークライミングの対象であり、八〇〇〇メートル峰のバリエーションルートも、ヨセミテで行われているビッグウオールクライミングの延長となっている。少なくとも登山の世界でのパイオニアたちは、一流のスポーツマンであり、彼らは学術登山などはやらない。こんな時代にAACKがヒマラヤにおけるパイオニアなどと言ったら、いい笑いものである。

ヒマラヤの未登峰を登るのが好きなら、極地法でもなんでも使って学術登山を続ければいいし、金を出してくれる企業があるなら、どんどんもらえばいい。ただそういった登山はマスコミにはうけるかもしれないが、登山・冒険としてはほとんどインパクトはない。ヒマラヤは個人の冒険の場であり、そこでのパイオニアは、多くの場合（特に日本では）、一般には知られておらず、マスコミにも取り上げてもらえず、自分で稼いだ金で登っている。ついでに言えば、冒険の対象というなら、ヒマラヤは特別な存在ではなく、国内だって創造力があれば、いくらでもあるだろう。

こういったことを認識した上で、AACKに存在価値があると思うなら、今まで通りにしても方針転換するにしても、続けたらいい。私だったらどこかの社会人山岳会に入るが。

アンケート

前略　最近のＡＡＣＫに入会者は、年に平均２人くらいで、その減少がたいへん気になっております。以前は京大山岳部の出身者はだいたいＡＡＣＫに入会していました。それがなぜ入会者が減少したのか、その原因をはっきりさせたいと思っています。お忙しい所を恐縮ですが、同じ山岳部に籍をおき、同じ部室で青春を過ごした先輩後輩の関係に免じて、ぜひ下記のアンケートにお答え戴きますよう、お願いする次第です。(注：ＡＡＣＫは現在会員350人余。新しい方向をめざして現在模索中)

1．私は山岳部に　　回生までいた。

1回生（3）　2回生（8）　3回生（5）
4回生（5）　5回生（2）　その他（2）

2．山岳部の生活は

1. 楽しかった　(22) 2. まあまあであった（3）　3. つまらなかかった（0）

3．山岳部を中退した人にききます。やめた理由は

1. 体をこわした（1）　2. 他にやることがあった（11）
3. 親が心配した（2）　4. 登山がこわくなった（2）
5. 登山がおもしろくなくなった（1）
6. その他（6）（山岳部の方針に疑問をもった、など）

4．現在の仕事は

1. 企業（9）　2. 自営（9）　3. 大学、高校などの先生（2）
4. その他（11）（大学院生など）

5．ＡＡＣＫの存在は

1.（よく）知っていた（23）　2. 余り知らなかった（0）
3. 全く知らなかった（0）

6．なぜＡＡＣＫに入らなかったのか

1. 積極的勧誘がなかった（勧誘があれば入ってもいいと考えていた）（8）
2. 体質にあわなかった（6）　3. 入っても得るところがないと思った（7）
4. 大した理由はない、ただ何となく入らなかった（5）
5. その他（3）（学者でないとだめかと思った、中退なのでだめと思った）

7．ＡＡＣＫのどこに魅力がなかったのですか

1. ＡＡＣＫの存在価値がないと思った（ヒマラヤはもう魅力が失せた）（6）
2. 人間関係がわずらわしかった（4）　3. 親しい仲間がいない（1）
4. 官僚的、独善的、閉鎖的であると感じた（6）
5. その他（2）（大人数で遠征には行きたくない）

8．どうしたらＡＡＣＫに山岳部卒業生がはいってくると思いますか

1. もう手遅れである（4）
2. もっと山行き（国内外）を活発にする（10）
3. そんなに会員をつのる必要はない（8）　4. わからない（3）

9．現在ＡＡＣＫはニュースレターやヒマラヤ学誌、時報など、会員サービスも行っています。それなら今からでも入ってもいいと考えますか

1. イエス（10）
2. ノー　(12)

10．今でもヒマラヤには行ってみたいと

1. 考える（11）
2. あまり行きたいとは考えない（12）
（年に一回妻とフリークライミングに海外の岩場にでかけている）
3. その場にならないとわからない

以上　発送数　50、回答　25　（回答率50%）、宛先不明　8

B君

私は現役のときにマサコン遠征があったので、ＡＡＣＫのことはそれなりに知っておりました。入会しなかったのは、ひとつは海外に行くだけの覇気が無かったから、ひとつはマサコン遠征をハタで見ていて感じたＡＡＣＫのやりかた（体質）に対する違和感があったからです。外部から見ていたので誤解があるかもしれませんが、主として政治的理由によって残されていた処女峰を、物質力（＝金）と政治力（＝力）であさるというＡＡＣＫの登り方に違和感を感じておりました。外を見回せばアルパインスタイルの世、まあどのスタイルで登るかは、個人の趣味と能力の問題ですからかまわないともいえます。しかし、もはや登山それ自体としては時代遅れの隊が、京大というカ

ンバンで他人の金で登るということに対しては、ウブな学生としては、許し難いことのように思っておりました。このような登り方はしたくない、ＡＡＣＫでは登りたくない、よってＡＡＣＫには入らない、こういうふうに考えて、当時は入会しなかったように思います。もっとも最近は私も他人の金で自分の研究（＝遊び）をする方向を目指しておりますから、他人の金で遊ぶと言う点で、ＡＡＣＫのやり方を非難できるだけの純粋さを失っております。歳をとったものです。

ならば今ならＡＡＣＫに入るかと問われれば、やはり入るつもりはありません。ひとつは、今の自分には山に対して、現役の時のような情熱が無い、特に将来に対する危険をおかしてまでヒマラヤにかける熱意が無いからです。ＡＡＣＫがヒマラヤの（特に処女峰）を目指す会である以上、ヒマラヤを目指さないものが入会するメリットはないでしょう。それともうひとつ、これは梅里の遭難に関するものですが、ハタから見る限り、ＡＡＣＫのあり方（体質）が、遭難以後変わったようには思われない。まあ、つきあいのあるＡＡＣＫの若手から聞いた所から得る印象でしかないのですが、目に見えてかわったとは思えない。ここに山岳会としての今のＡＡＣＫに対する大きな不信があります。もし、ルーム（山岳部）で遭難があって、若者の命が失われたとしたら、ルームはその個人やパーティのみにその原因を求めるだけではなく、山岳会としての自らのあり方にも反省の目を向け、変えるべきは変えていくと思います。「二度と悲劇を起こさない」というのが、口先だけのことでないならば、遭難を起こした組織は自己変革していかなければならないでしょう。それができない組織は、山岳会としては死んだ組織です。ハタから見る限り、梅里の遭難は隊の失点だけによっておきた悲劇ではなく、そこには大なり小なり、ＡＡＣＫの体質が関わっていたように思います。にもかかわらず、遭難以後、ハタ目にはＡＡＣＫが自己改革をしたようには思えない。これはどういうことなのでしょうか。私はＡＡＣＫがもはや組織として更正力をもたない死んだ組織であることの証明のようにしか思われません。

長くＡＡＣＫに関わりを持ち、この会に愛着を感じている古い会員ならば、会に更正力があろうが無かろうが、この会に執着する理由があると思います。しかし、これからこの会に身を寄せようとする者よりすれば、遭難後に自己変革できない組織を信頼してそこに身を寄せようとは思えません。梅里の遭難以後、ＫＵＡＣの若手が入会しないのには、それなりの理由があると思います。

私はＡＡＣＫの外部にいる者ですから、敢えて言ってしまいますが、ＡＡＣＫはすでに歴史的役割を終えた会だと思っております。このまま会として生命を静かに終えても、輝かしい歴史を持った山岳会として、長く人々に記憶されていくと思います。それで十分なのではないでしょうか。どうしてそれで十分ではないのでしょうか。

あれだけの遭難があっても自己変革できなかった会が、果たして今から面貌を新たにして新しい会として出発できるでしょうか。私は疑問を感じます。このアンケートの前にＡＡＣＫがなすべきだったのは、梅里の遭難に対する徹底的な自己反省ではなかったのでしょうか。私はそう思います。我が親愛なる下級生を梅里で失ってしまった者としては。

Ｃ君

ＡＡＣＫの存在意味が単なる山岳部ＯＢ会やＯＢたちの山登り互助組織ではなく、海外学術登山である以上、入会希望者は減っていくのでは？特に最近の山岳部員そのものの現象を見ているとそう思います。

小生としては今はさておき、退部時にはヒマラヤへのあこがれは非常にありましたが、そのとき企画された一パーティの性格や上層部の人柄が、自分に合わなかったことが、ＡＡＣＫそのものに対する興味を無くさせたと思います。

Ｄ君

ヒマラヤの未踏峰は減っていくのでＡＡＣＫの活動範囲も狭くなるのは当然。ヒマラヤのしかも未踏峰をいう条件を取り払い、より広範囲の冒険に取り組む組織にしてはどうか。そうすれば山岳部以外の母体である探検部の活動とも整合性が出ると思います。

Ｅ君

最近のヒマラヤ登山の様子をしらないので、無責任発言と聞き流していただいて結構せすが、ヒマラヤがツアーでも行けるようなところになってしまって、遠征を目的として組織を維持するのはむつかしいのではないか。地域研究の方向にいくのか、あるいはシエラクラブの様になるか、なにか存在意義を考える必要があるのではないでしょうか。

F君

おそらく相対的に強いタテの系列とヨコのつながりでなりたってきた旧来の同窓会的組織がアクチュアリティをもつものでは無くなってきている点が、AACKの弱体化（？）に大きく写っていると私は考えています。

さらにAACKの活動に含まれているーたしか学士がつく理由にもなっていたと記憶していますがー「学術調査」も、'80年代からこのかたの経過において、時代要請に取り残されてしまってはいないだろうか、とも感じます。もちろん、この点については、あくまで登山に対する（タテマエ的な意味での）オマケなのかもしれませんが。

ともかくもAACK(また同時に京大もですが)は、かってのようなネームバリューを喪失してしまっており、それは復元不可能（かってのような形でもう一度という志向に関しては、と限定をつけておくべきでしょいうが）のように思われてなりません。

こうしたお手紙を頂戴したうえで、かくも外在的な批判じみた意見を述べるのは多少気がひけないでもありませんが、敢えて言うならば、「夢（どのような?）よ、もう一度」式のアナクロニズムは無意味だと考えます。それよりも非常な速さで移り変わっていく状況とー状況の中でーいかに折り合いをつけるかの方途を全く新たにさぐることが、すくなくとも建設的（これも化石のようなタームになってしまったかも）ではないでしょうか。

皆さんのご発展（もちろんオルタナティブな方向への）をお祈りしつつ。

G君

若い人にとって旧来の遠征、あるいはアルペンクライミングまでもあまり魅力がないのでは。（岩と雪も休刊になっていますし）。今までの遠征のスタイルにこだわらない活動を行うか、登山にこだわらない新しい冒険のスタイルをみつけだせるかではないでしょうか。

アンケートの結果について

いちいち分析する必要はないと思うが、簡単にまとめておく。

一．なぜAACKに入らなかったか

積極的勧誘がなかった、ただ何となく、の合計が十三、体質にあわぬ、入っても得るところがない、が十三で、半数が批判的である。学者でないと入れないと思ったという回答も含めて、あまり熱心な勧誘がなされなかったことがわかる。この反省の上に立って、今後の会員募集のありかたを検討する必要があると思う。

一方否定的な回答と付記された文を読むと、若い人のヒマラヤ観に対応できないAACKの行き方に、若い人が反発を感じていることがよくわかる。京都大学帝国主義的遠征という感じは、京大の中にいると分からないかもしれないが、外にいるとよくわかる。

二．AACKの存在価値と今後について

AACKはもはや存在価値がない、という意見は、ヒマラヤの処女峰がほとんど無くなり、初登頂の意義がうすれた今日、当然でてくるし、会員の中でもよく議論になるところである。将来の目的をどうきめるか、この問題の議論をもっと真剣に考える時が来ていると思われる。

アンケートでもこの意見が六人ある。このほか、AACKが官僚的、独善的、閉鎖的であるという意見をあわせると、AACKの目標と体質が魅力を失っていることがわかる。

一方AACKはもっと国内外の山行をさかんにするべきである、という意見（10）は、登山団体としてのAACKの活動にあきたらない若い人が多いことがわかる。会員の登山活動はそれなりにおこなっているのであるが、若い人を誘って山行を共にするとか、また広報活動を行うとか、会のありかたをもっと考えるべきではないか。

AACK会員を増やす必要なし、ておくれである、という意見（12）が過半数を占めることはAACKに若い人が入らない裏付けにもなっている。ただ、今から入会してもいいという意見が約半数あることは、かろうじての救いでもある。

ヒマラヤにあまり行きたくないという意見が、過半数を占める。やはりヒマラヤは今や若い人の心を満足しない。若い人は、むしろフリークライミングのように個々の冒険の世界に向っているようである。

興味あるのは付記された意見である。これらの意見をきくことができただけでもアンケートをとった意味があると思う。貴重な意見を寄せていただいた方々に感謝する。

回答率が低かったことは、アンチAACKの表

れかもしれない。しかし、約半数の人が興味ある回答を寄せてくれた。ここにあわせて深く感謝する。（平井一正）

AACKに関して思うこと

内藤　望

一．AACKの本来の姿

まずはじめに、AACKとは本来どういった会であるか、私の抱く印象をまとめておくと、①海外遠征が目的②京大山岳部や探検部OBが中心ではあるが、組織的には別組織である（OB会ではない）。この2点が挙げられます。またAACKが「山岳会」を名乗る以上、山岳会であるならば、③会員の入退会は、基本的には個人の自主的判断による（無理に会員を募るべきではない）。④あくまで登山という行為が会の中心であり、会の組織や活動はすべてそれに集約され得るべきである。その当然の帰結として、実際に山に登る（っている）活動的な会員が会の中心的立場にいるべきである。この二点が満たされるべきものと私は考えます。

二．現実のAACKの実態

一方、現実の（「少し前の」というべきか？まさに現在のAACKについては、よくは知りませんのであしからず）AACKの実態については、山岳部部員という立場で見聞してきて得た印象をもとにすると、上記④の点において疑問を持っています。私の山岳部現役時代（一九八五～一九九一年）、AACKからはナムナニ（一九八五年）、コンロン（一九八八年）、ムスターク・アタ（一九八九年）、シシャパンマ（一九九〇年）、そして梅里雪山（一次隊一九八九年、二次隊一九九〇～一九九一年）と多くの海外遠征がなされ、はたから見れば実に活動的な山岳会と思われたところでしょうが、実際にそれらの隊に参加した人たちが、山岳部現役部員や他の活動的な山岳会に比べて、「活動的」だったのでしょうか？　募金活動を始め、隊員の方々が忙しくされていたことは承知していますが、これから山に向かう立場の人間として、国内での準備山行や体力トレーニングといった根本的な部分が、充分であったとは思えない節が多々ありました（すべてがそうであったとは思いませんが）。あるいは、山行前の（山岳部でいうところの）「検討」も充分であったのでしょうか？　対象に関する資料を集めてルートや気象等について研究することは当然なされていたと思いますが、隊員個々人の技量や相性を相互把握し、対象とのかねあいの上でタクティクスを作り上げ、それを少なくとも隊内において（できれば山岳会内において）共有する、といった過程がどの程度なされていたのでしょうか？

これについては、別に梅里雪山二次隊の遭難のみを見ていっているわけではありません。それ以前のコンロン隊、ムスターク・アタ隊の頃から、私や山岳部の一部においてこの疑念は起きていました。両隊とも、対外的あるいはAACK内的にも「大成功」という結果で捉えられているようですが、登はん隊員四名中三名が別地点でほぼ同時に雪崩に巻き込まれながら、全く偶然にも全員無事ですんだだけともいえるコンロン隊、第一次登頂隊員二名（うち1名は当時山岳部現役部員）が、決して好天とは言えない天気の中、まるで単独行者のように大きく離れて別行動をとった末に、別々に登頂したムスターク・アタ隊（そういえば登はん隊長のクレバス転落なんてのもあったっけ）のどちらも、決して「コンプリート」ではないのは明らかであり、更に最も理解しがたいことは、それらの総括が山岳会内において曖昧なまま放置され、そして次の遠征隊が出発していったことであります。

登山という行為の中には「遭難」という現実が常に可能性として存在する以上、それを行う岳人たるもの、そしてその岳人で構成されている山岳会たるものは、この「遭難」という現実と常に対峙せねばならず、そしてその可能性を少しでも小さいものにするために努力すべきであるのは、自明の理でありましょう。ところが、少なくとも当時のAACKは、このような感覚において、私を含む当時の山岳部の一部には理解しがたい山岳会に思えてなりませんでした。いや、「AACKとは本当に山岳会といえるのだろうか？」とまで思ったものです。我々が抱いた疑念が的を得ていたかどうかは判断しづらいところですが、とにかくAACKが「新しい方向を目指して模索」するのであれば、まず第一に本来山岳会としてのあるべき姿という根本的な点から、組織を再点検する必要があると思います。

三、今後のＡＡＣＫのありかた

以上は、ＡＡＣＫに対する批判的な見地からの、私がＡＡＣＫに入らなかった理由といえるものですが、実際にＡＡＣＫに入らなかった個人的理由としては、(a)実際に卒業後一緒に山行を共にしたいと思っていた親しい身近な同級生・先輩たちは入会していなかった。(b)ヒマラヤをはじめ海外遠征には興味があったが、具体的目標を持っていたわけでもなく、また海外遠征のためにはＡＡＣＫ入会しか選択肢がないとは考えなかった。（これは今でも同じ）つまり、どっかの具体的な山に是非行きたくて、そのためにはＡＡＣＫに入る必要がある、あるいは入った方が得策だといった積極的理由はなく、しかも前述したようなＡＡＣＫの組織に対する批判的な考えを持っていた結果として入会しなかったと説明できると思います。

考えてみると、入会した動機に対する説明ならまだしも、入会しなかった説明というのは、正直言って変な気がします。というのは、ＡＡＣＫと山岳部現役部員の関係についての認識に相違があるからではないでしょうか？「以前は京大山岳部の出身者はだいたいＡＡＣＫに入会していました。」というのは、おそらくＡＡＣＫがＯＢ会的な存在であったからなのではないでしょうか。ＯＢ会ではなく、しかもふつうの山岳会とは異なる（国内山行は主目的ではない）ＡＡＣＫに入会しない山岳部出身者がいても何ら不思議はないと考えますが、いかがでしょうか？　ヒマラヤをはじめとする海外遠征の価値という点についても、山そのものの魅力は今も昔も変わりはないながらも、「海外遠征至上主義」といったような考えは現代では通用しないと思います。そして、どうすれば山岳部出身者が入会するようになるか（取り込むことができるか）が、ＡＡＣＫの新しい方向を探る際に重要なのではなく、実際にＡＡＣＫの中で自分のやりたいことを持っている人たちが、自らにとってより魅力を感じるような山岳会の姿を探ることの方が本質的であり、山岳部出身者が入ってくるかどうかはその結果でしかないと考えます。すなわち人に媚びて組織の継続を図るのではなく、現代におけるＡＡＣＫの存在価値を再認識し再構築していく中で組織の変革を図るべきだと考えます。ただし模索段階における一つの視点（「ちょっと人の意見も聞いてみようか」）という意味では理解できますし、その意味においてのみ、今回のアンケートの意義があろうかと思います。

正直言って、私にはＡＡＣＫに入る気はないものの、山岳部時代からの因縁もあって、ＡＡＣＫの動向はやはり気にはなります。ですから今回のアンケートに際して、ついつい駄文を連ねてしまいました。また特にコンロン隊やムスターク・アタ隊という具体的な例を出しての批判は、あまり好ましいものとは思えませんでしたが、その方が判りやすいのではないかと思い記しました。その他の批判がましい部分についても、お気を悪くする部分があるかもしれませんし、私の認識不足や誤解等もあるやもしれませんが、若輩者の言として、どうかお許し願いたく存じます。

（一九八五年山岳部入部、名大水圏科学研究所勤務）

（この文はアンケートに添えられていたものですが、特に筆者の了解を得て独立の文として扱いました―編集者）

ＡＡＣＫの抱える問題点

中村　真

私がＡＡＣＫに正式入会してから早くも三年が経過した。現在は京大大学院に籍を置くものの元々慶応出身の私にとって、入会当初はあだ名がわからず苦労した。「クリンチが梅里に登りたがっている」と聞いて、しばらくの間、クリンチとは誰かのあだ名だと思っていた。まさかアメリカ人の本名だったとは。

ところで、先日京都府岳連のＧ１（ガッシャーブルムＩ峰）報告会に出席した。三十二歳の隊長が率いる総勢三人のコンパクトな隊で、総費用は切り詰めに切り詰めて三三〇万円、当然全て自己資金だそうである。悪天候に難儀しながらも途中からアルパインスタイルで無酸素全員登頂。素晴らしいの一言である。

Ｇ１と梅里雪山を単純に比較するのは難しい。Ｇ１が位置するパキスタンでは登山のサポートシステムが社会の仕組みの中に出来上がっているし、Ｇ１そのものは各国の隊がひしめく既踏峰である。一方、中国雲南省の未踏峰である梅里雪山の地元では「登山」という概念そのものが浸透していないのだから、ＢＣへ入るまでの登山隊を取りまく環境は全く違う。しかし敢えて両者を比較するならば、Ｇ１隊の予算規模は梅里の数十分の一。一方で世間的評価、特に玄人どころのクライマーからの評価は、恐らくＧ１隊の方が遥かに高いと思う。事実、クライマーの間でのＡＡＣＫの評価は低く、社会人山岳会にも籍を置く私の周囲

では、まずＡＡＣＫ批判しか耳にしない。一般登山家の会合では自分がＡＡＣＫ会員であることを名乗るのが恥ずかしくさえ思われる。何故この様な状況になってしまったのだろうか。

確かにＡＡＣＫは過去に素晴らしい業績を残してきた。数々の初登頂や学術研究、また日本山岳会関係のプロジェクトへの貢献。しかしこれらは全て過去のことである。今は個人でどんどんヒマラヤへ行ける時代であって、ヒマラヤへ行くのに最も障害となるのは資金でも政治力でもなく、休暇がとれるかどうかである。従って、一般のクライマーにとって、ＡＡＣＫの政治力や資金力に価値を見いだすことはあまり無く、むしろそうした組織力はかえって重荷になるのではなかろうか。重荷になるばかりか、登攀力ではなく資金力・政治力主導の山登りはどうしても「鼻について」しまう。これではＡＡＣＫに入会しない山岳部ＯＢが沢山いてもおかしくない。また募金に頼った登り方では、ムダを省く隊運営の追求がどうしても甘くなってしまい、隊員の認識にも影響してくる。今やＡＡＣＫは、山に登る団体というより登山隊を「派遣する」団体であり、山登りのサロンとなってしまっているのが現状だが、こうした現実さえ認識していない会員も多いのではなかろうか。

そもそも、京大の山登りしか知らず、社会人山岳会で山登りをしたことのない会員が多すぎる。そうするとどうしても偏ってしまう。また、日頃山登りを実践していない会員が多いのも、一般の山岳会との意識の隔たりを大きくしている。

結局、ＡＡＣＫの全てのマイナス要因を解決するには、ＡＡＣＫ以外の社会人山岳会の登山隊に参加し、まともな（自費・自力を旨とする、できれば少数隊員の）遠征を準備やトレーニング山行を含めて経験することしか無いように思う。なぜならば、少数であれば当事者意識が出るし、自費であれば予算や経費節減を真剣に考えるし、自力を旨とすれば目的意識も高まりトレーニングにも精が出るのである。梅里雪山計画の中枢にいて、これらの点が全てＡＡＣＫでは甘いように見受けられる。外部で積極的に登り込む会員がせめて全体の一割近くになって来ればＡＡＣＫは変わると思うが、そうでなければ若い会員も入らず毎年一歳ずつ平均年齢が加算されていって、しまいに衰退していくしかない。

今西錦司先生は「ヒマラヤへ行くための会として」ＡＡＣＫを作ったと私は聞いている。普通のヒマラヤならば誰でも容易に行ける現在において、ヒマラヤ行きの手段としてのＡＡＣＫはもう役目を終えている。我々は新たな目的を模索する時期に来ているのではなかろうか。

ある体験

高山病と二日酔いの奇妙な関連性について

中島道郎

酒の酔いには二種類あります。酩酊と宿酔すなわち二日酔いです。酩酊はアルコールが直接脳神経に作用することにより引き起こされるもので、飲んで数分後には出現します。その症状の種類や程度は人と時と場合によって千差万別です。それに対して二日酔いは、数時間眠って目が覚めると出現するもので、重症度にはかなり差はあるものの、症状はみな同じです。すなわち、激しい頭痛、食欲不振ないしむかつき・胸やけ・胃痛、けだるくて起き上がる気力も生じず、また辛うじて出勤しても何もする気がおきない、などきわめて苦しくて不愉快な一連の症状群の総称です。そういう症状が出るか出ないか、それは体質で、その苦しさは味わったことのある人以外は到底理解できないでしょう。しかしそれが病気ではない証拠に、症状は午後になると自然に消え、気分はよくなります。この症状は高山病と同じであるところから、私の『学説』は出発します。

これは推測ですが、二日酔いは急性高山病と同じく、脳細胞の低酸素症に基づく脳浮腫に違いありません。つまりアルコールの中間分解産物が脳細胞に取り付いて、細胞が酸素を利用する機構を邪魔しているのです。浮腫というのは、細胞内あるいは細胞と細胞のあいだに水がたまることですが、細胞内外の水の出入りに酸素が関与しており、酸素が不足すると脳細胞の水の出入りが滞って水はけがわるくなるため浮腫になるのです。

この『学説』に従えば二日酔いの治療は簡単です。脳細胞の酸素が不足しているのですから、大量の酸素を補給してやればよろしい。デマンド・バルブという装置を用いて、一〇〇％の純酸素を吸わせると、ものの十分もしないうちに気分爽快になります。それはまるで空一面の黒雲が雲散霧

消して日本晴れになったような気分です。ただしこの場合、純酸素でないとうまくいきません。また脳細胞の浮腫をとる目的で利尿剤を併用すると効果的ですが、この場合血液はむしろ濃縮状態にあるため、排尿を促すと同時に点滴しながら補液するという高等技術が必要となります。

二日酔いにむかつきは付き物です。これを胃炎の症状と間違えて、テレビなどでも、二日酔いの薬として胃腸薬を宣伝したりしていますが、それは見当違いです。二日酔いはそのうち自然に治ります。それをその薬の手柄にするのは虫がよすぎます。飲んですぐきくのでなければ治療の意味はありません。

次に予防ですが、申すまでもなく『量を過ごさぬ事』。それと空き腹にいきなり大量のアルコールを入れることは厳禁です。『駆けつけ三杯』はいけません。まず何か食べた後で、ゆっくりと少量づつ飲みましょう。蒸留酒よりも醸造酒の方が、特にワインが、二日酔いしやすいようです。うっかり量を過ごしたと思ったときは、のどに指を差し込んで胃内容を全部吐いてしまう事です。吐いてしまえばまず二日酔いになることはありません。それから大量の水を飲むことです。どんどん、二リットルあるいはそれ以上も飲んでアルコールを尿と一緒に排泄してしまうのです。推薦できる予防内服薬はグルタチオンです。飲み過ぎたなと思ったら一〇〇—二〇〇ミリグラムを大量の水で飲みます。ただし有効なのは予防だけで、翌朝発症してしまった二日酔いには全く無効です。ほかに民間伝承的予防薬はたくさん言われていますが、私は信用しません。

ところで私は、シシャパンマ登頂以降二日酔いから解放されましたが、それは高所順応の賜物なのです。それを証明するため、以下私の『学説』を展開していきます。

脳細胞は極めて酸素依存の高い細胞で、低酸素状態には敏感です、それだけに一度低酸素の試練を受けると、それを何とか生き延びようとしてその内部機能を変化させてゆき、その結果、それ以後の低酸素暴露に耐えられるようになるのです。脳細胞が高所に順応する、ということはこういうことです。従って、二日酔いによる低酸素症にも耐えられるようになるのです。しかし、その逆は成り立ちません。すなわち、『二日酔いしない人は高所に順応しやすい、あるい急性高山病にかからない』とか『何度も二日酔いを経験してこれを克服したら高所順応が獲得される』などということは全くありません。大脳低酸素症の発症機序が全く違うのです。アルコール性脳低酸素症はアルコール中間分解産物が脳細胞に取り付いて脳細胞の酸素利用を邪魔するだけで、細胞の内部機構に変化を与えてはいないのです。従って、その物質が代謝され、脳細胞からはなれてしまうと、その影響は後に残りません。巷間、普段酒で脳細胞を鍛えておれば、高所に強くなる、と信じている人がありますが、それは誤りです。ただ、二日酔いをしらないという人は、低酸素性脳浮腫にならないのか、なってもそれを感じるセンサーがないだけなのか、という問題に対してはまだ未解決です。

それにしてもこの高所順応による二日酔い耐性がこれでまる六年間も続いていて、今に至ってもまだ『己の欲する量に従いて二日酔いを知らず』という日々だという事は、大変幸せなことです。まあしかし、これに安住して飲み過ぎて肝臓を痛めるということのないよう毎日自戒の今日この頃ではあります。

（この原稿は『週刊金曜日』に掲載されたものに少し色を付けてみたものです。）

—世界最遠峰—

「チンボラソ」登山

伊藤寿男

ニューズレターNo. 1に掲載された酒井敏明さんの名勧誘文に魅せられて八月の下旬エクアドルの最高峰チンボラソ（六三一〇メートル）に登ってきた。

「この山の頂上はチョモランマの頂上よりも地球の中心からは遠い。いわば世界最遠峰の名誉に輝く山である」と酒井さんは説明されている。

酒井隊長以下十二名、うちわがAACK会員は、酒井敏明、井上潤、阪本公一、能田成、山本武久の諸氏に私を入れて六名。これにJAC京都支部会員五名に井上さんの友人が加わる。平均年齢五十五歳余、典型的な中高年登山隊である。JAC京都支部会員のうち三名が女性。今西錦司先生の愛娘皆子さんはメキシコから現地参加され、流暢なスペイン語に我々は大いに助けられた。

八月二十九日午前八時二十分、六名（内女性ひとり）が登頂に成功した。内AACKは阪本、能

田、それに私の三人であった。

きちんとした登山記録はいずれ別の機会に報告されるだろうが、本稿は思いつくまゝに今回の山行の感想を二、三書かせて頂く。別に山本が関連記事を書く。

《オーダーメイドの方が安い登山》

現地のガイド会社を相手に酒井さんが孤軍奮闘、ハードネゴをされ、登山計画を纏め上げられた。

私も南米に三年半程駐在し、ラテン系の人達の、いい意味で楽天的、悪くいえばえゝかげんさをよく知っているだけに酒井さんのご苦労は大変なものだったと思う。お陰様で単独パーティかつオーダーメイドという理想的な登山ができた。その上費用まで超廉価であった。因に同じ頃、日本の業者が募集した計画では一人七十八万円我々はこの半分の値段で実に充実した登山を経験してきたのである。

《労少なくして功多い登山》

今回のように、高年齢かつ実力、体力、経験にバラエティがあり、また時間的に余裕のないパーティが実効を上げるには現地ガイドが絶対に必要である。ガイドレスであったならこの期間内ではとても歯が立たなかっただろう。当初はラテン系という先入観で心配したが、杞憂であった。ガイドのマルコ・クルツは責任感旺盛なリライアブルな男であった。ヨーロッパ各国の国際ガイド資格を有し、フィツロイに登り、アマゾンをいかだで下った冒険家でもある。まさに「いいガイドに当たった」のだ。

《現役気分の登山》

半分がＡＡＣＫ会員であり、常に安心感があった。私の場合、アタックの間、高度の影響もあったのだろうが、時々フッと京大山岳部で活動している気分に陥った。同時期に苦楽を共にした阪本、能田、山本の諸氏がいたせいもあろう。

《憂いのない登山》

今回は、何の事故もなく帰国できたのは何よりであった。酒井隊長には大変なバードンであったと拝察するが、深甚の謝意を表したい。私自身も山岳部出身以外の人達とお付き合いできて楽しかった。今後この種の登山も増えてくると思われるが、混成パーティの事故対策（留守本部、救援隊、救助資金、責任追及訴訟、付保ｅｔｃ）につき、ツアー会社の約款等を参考にして詰めておく必要があると思われる。

中高年登山と高度順化

―チンボラソ登山の経験から―

山本武久

偶然の機会を得て、エクアドルの最高峰チンボラソ登山に出かけることとなった。八月二十二日、成田からシアトル経由でマイアミに着き、次のエクアドルの首都キト行きの便待ちの宿泊となる。マイアミでの海水浴を楽しんだが〇米からの高度順化は、どうなるのか不安がよぎる。日付変更線を越えているので、二十三日夜キトに着く。ガイド会社の市内観光を変更して、翌日から高度順化のためのハイキングが始まる。①二十四日、ラック・ピチンチャ峰（四七一四メートル）キトに宿泊（二八〇〇メートル）②二十五日、コトパクシ峰の登山小屋（四八〇〇メートル）コトパクシ国立公園のキャンプ地泊（三八五〇メートル）③二十六日、ルミニャウイ峰（四七一一メートル）の岩峰取り付き地点手前まで（四二〇〇メートル）移動してリオバンバ市のホテルに宿泊（二八〇〇メートル）④二十七日、チンボラソ峰ウインパー小屋上部のモレーンの丘（五一〇〇メートル）登山キャンプ地泊（三八五〇メートル）

この間、①で、一名気分悪く下山、③で、体調不十分のため三名が休養した。そして本番、二十八日夜九時出発、翌日午後三時帰着の実に十八時間に及ぶ行動であった。

ここで、高度順化の視点からハイキングを見てみよう。小生の日本出発前の安静時心拍数は、五〇～五十四で前日の夕方のトレーニングが激しいときで、五十四ぐらいまでになる程度である。キトについて翌朝は五十四、ハイクに出る。バスで三九〇〇メートルまで上がり登山開始。上がるにつれて頭痛におそわれる。頂上直下の登りは急勾配で、富士山の直下と同じかそれよりきつい。ゆっくりと歩を進めるが、大腿部の筋肉に痛みを感ずる。急激に乳酸が貯まっているようだ。トライアスロンの競技で筋肉を使ったときの状態よりも激しく、始めての経験であった。頂上での心拍数は八〇、つまり、運動をしていないような状態

なのである。ちなみに運動時心拍数は一二〇～一三五である。下山しても頭痛は収まらず、食事前のひとときを休養にあて、少し楽になる。翌日の安静時心拍数は五十四、だから、ハイクの疲労は全くない。気分は、とても快調である。②は、四六〇〇メートルから四八〇〇メートルまでの登山であるが、また、頭痛におそわれたが、程度は、昨日に比べると、ずっとましである。キャンプ地での目覚めの心拍数は五十九、疲労感はないので、ここの高度（三八五〇メートル）のせいだろう。アタック前のそれも六十二で、アタックキャンプ地の高度（三八五〇メートル）とも似ているので、高い分酸素を取り込むため正常に身体が機能しているのだろう。③は、低いため全然異常を感じない。ほぼ四〇〇〇メートルの高度であるがここまでは、完全に高度順化が出来ていると思われる。高山植物の写真に夢中になり、若いガイドと二人になったため、走って隊を追いかけたが息切れもへばりもなかった。ちなみに、日本に帰った翌日から十～十五キロメートルランニングをしたが、日本を出る前より快調であった、が、一週間位から次第に疲労が残るようになった。高地訓練といった訓練もしていなくても高度順化のお陰かもしれない。④の前の安静時心拍数は五十二で、さらに低くなり体調極めて良好、終点では、頭痛とはいかなくても、なにかふあーとした、足が地に着いてない感じである。心拍数九〇で、心拍数も上がっているので高度順化が進んでいるものと思う。そして、アタック、この④地点を越え、アイゼン装着地点で、二名が体調不調とのことで休息、既に、四九〇〇メートル地点で一名離脱したので、三名とアイゼン不調のためアタックを中止した小生と、最初から登頂を見合わせた一名が参加しなくなった。休んで、下山に移る頃より少々の頭痛を感ずる。下の小屋（四八〇〇メートル）での休息後、途中の五九〇〇メートルから登頂を断念して下山してきた一名の計六名でアタック隊の六名を待つ。彼らを迎えに雪線まで登ることにする。非常に早いピッチで登る。休息なしで、到着、すごく快調である。前に来た地点だからなのだろう。皆と合流して下山する。登頂組の六名の体力はそれぞれ異なっていた。まだ十分の者、完全に燃え尽きている者、差がありすぎた。

登頂メンバーに聞くとかなり高度障害に苦しめらたようすである。どうも高度順化は、順調にはいっていなかったようだ。振り返ってみると、③は、有効ではなかった。もっと高いところまで進むべきだった。さらに、②は、もっと高く、出来れば、雪線（五二〇〇メートル）まで、頭痛を我慢して登るべきだった。高度順化の過程では①位の状態は必要なのであろう。

最後に、次の教訓を受けた。

① 高く、厳しい山ほど安全に楽しむためには、スピードと判断力が必要である。（たとえ、ガイド付きの山行でも）そのために、高度順化は絶対に必要である。そのために、自由に上下行出来る体力が必要である。高度順化は上下行する事により確実に身に付く。

② 自然は人力を越える。ただ神に感謝する気持ちを忘れてはいけない。今回も幸運に無事山行を終えることが出来た。本当に有り難いことである。

言いたい放題

コンロンはなぜ有名か？

－AACKよ、記録を残そう－

北村泰一

一・コンロンはなぜ有名か？

『・・千載秋の水清く、銀漢空にあおぐとき、通える夢はコンロンの、高嶺の彼方ゴビの原・・』は、世に知られる旧三高寮歌「逍遥の歌」の三番である。京都で学生時代を過ごした者には、この『コンロン』の名前を知らぬ人はなかろう。三高卒業者は勿論、京大もそれを引継ぎ、京大の学生が歌っていた。ダークダックスもそれを歌い、日本中で『琵琶湖周航歌（旧三高歌）』と共に有名になった。

私は京都で生まれ、身の回りが三高出身者が多かったせいもあり、山で街で、昼に夜に、よくこの歌を歌った。だから、この『コンロン』の名前は独特の響きで自分に迫る。『ヒマラヤ』という語句も身に迫るが、それとの違いは、ヒマラヤは現実、いうなれば愚妻。『コンロン』は、ヒマラヤよりもっと秘境で、夢のまたその夢、『山の彼方』のような響きをもつと感じるのは自分だけだろうか。いうなれば恋人。それも永遠の恋人である。歌いながら、何時の日にかこの『コンロン』に行きたいと願った。そして、その機会が一昨年（一九九四）きた。九大日中合同探検隊でコンロンに行く機会があった。しかしそこで病を得て、

現在も言語障害が残っている（前号参照）。

私は、四十年前、昭和二十九年に学部を卒業した。山岳部では、『低くてもよい、人の登っていない山（初登頂）をせよ。人のいっていない地域にゆけ（探検）』と教えられてきた。

京大山岳部の創設者に等しい今西錦司、西掘栄三郎、桑原武夫、多田政忠などの諸氏が活躍した昭和の始めの頃には、まだ、日本国内に、季節を選べば未登頂、未踏査の峰やルート・地域があった。しかし私の在学した昭和二十年代の終わりには、もはや国内には未踏峰も未踏査の地域もなかった。それらはヒマラヤか中国の奥、アマゾンやアフリカの密林、南極やグリーンランドなど、外国にしかなかった。だから、卒業するとき、山岳部の友人は皆外国へ出たがった。

その頃は（昭和二十九年、一九五四年）まだ固定相場（一ドル＝三六〇円）で、日本も、四等国と世界に蔑まれ、外国へ出るのも自由でなく、国の許可が要った。卒業も間近になった時、山岳部の友人達は、どうしたら一生山とつき合えるか、どうしたら職業と探検を一致させるかとそれぞれ悩んだ。ある人は林業や生物の道をえらんだ。ある人はジャーナリズムの世界に入った。ある人は当分の間それを諦めて、一見、山と関係のない職業を選んだ。それぞれが、一生をかけて『山と探検』を実行するためだ。卒業するときにそれぞれが思った。自分は『垂直組』だと。一生の目標を『高さ』におき、未知の、そして、一メートルでも高いところへ登ろうというのだ。エベレストへ三回もいった人もいたし、ヒマラヤ八〇〇〇、七〇〇〇メートル級の初登者として輝いた人も何人かいた。実際に山に登らなくても、それぞれの職場で新しい領域を開拓した人も多かった。

また『水平組』というのは、高さは追求しないが、未踏地をどこまでも進もうというものだ。私は『水平組』を宣言した。そして『南極』『北極』へいったし、『アマゾンの密林』『サハラ砂漠』もかいま見た。ペルーの砂漠やパラオやヤップの孤島、タイやインドの人のいっていない地域に行った。

一昨年、コンロンへゆかないかと誘われた時、『待てよ、コンロンといえば「垂直組」のゆくところだ』とは思ったものの、自分も遅蒔きながら、これから『垂直』の人生が始まるのだと本氣で考えてしまった。それに、コンロンとは『四十年間の憧れではないか』。そうだ、四十年前の恋人に逢いにゆこう。そして参加してコンロンの麓で倒れた。病など、生まれて初めての経験である。

往く時、北京の歓迎会で、中国人の前で『・・通える夢はコンロンの・・』と歌った。これから彼らと共にゆくコンロン（正確にはココシリ地区であるが、大地域的にはコンロンといってよい）を目指しての、自分の四十年の想いと、中国人の共感を期待してのことだった。勿論、彼らはコンロンの名を知っているであろうと思ったからである。ところが、彼らは奇妙な顔をした。聞くと、コンロンなんて知らないという。われわれはびっくりした。ある中国人の物知りがいった。

『中国人にとって、コンロンはそれ程有名ではありませんよ。昔々、中国歴史の曙の時代に西王母という女性の王がいた。それが、西のコンロンに住んでいたといういい伝えでその名を知る位ですよ。それも、その話しは高等教育を受けた者だけが知っているいい伝えですよ』と教えてくれた。当の中国人が知らない程の『コンロン』を、何故三高生が歌っていたのだろうか。

中国から帰って、すぐに三高寮歌をしらべてみた。『明治三十八年、澤村胡夷作』とある。明治三十八年といえば、一九〇五年、やっと日露戦争が終わった年だ。何故、中国人も知らないようなコンロンの名を当時の三高生が知っていたのであろうか。思いあたることがあった。中央アジアの探検で、日本人として忘れられないのは大谷探検隊。その隊長は大谷光瑞。京都の西本願寺の若き座主、大谷光瑞が中央アジアの探検を開始したのが明治三十五年である。だから、三高生がコンロンの名を知ったのはその影響ではないか、と思う。大谷探検隊ならコンロンの名を知っていて不思議はない。探検隊の帰国後、当然、講演会が地元の京都で行われて、時の聴衆、三高生の若い心をゆさぶったに違いない。澤村胡夷氏も、きっとその一人であったのであろう。そしてコンロンの名が寮歌に登場したに違いない。

二．記録を残せ。次代が夢をもつために

コンロンと並んで『ゴビの原』も出てくる。『タクラマカン』と歌いたいところだが、きっとゴロの関係でゴビとなったのであろう。

いづれにせよ、普通には知られない『コンロン』や『ゴビ』が、昔から知られているのはその歌の故である。もし、三高生が歌にその名を残さなかったら、我々がコンロンの名を知っていたか、まして、それに『久遠のアコガレ』を持っていたか甚だ怪しい。

大谷探検隊の偉業は、彼らが思いもつかぬ『私』

の中で生き続け、そうして、一〇〇年の後に、こんな形ではあるが、その一端が受け継がれた、といえる。だから、偉業の影響は、どんなところへ、どんな形で、影響が現れるかわからない。そのタイムスケールも一〇〇年単位である。

ＡＡＣＫは、戦後、あまた偉業を成してきた。これが天下に認められ、また、それが次代の青年の心に住むには、やはり、それらを記録として残さなければならない。

もちろん公式記録はすでに出ている。しかし、人の心を射るのは、そんな記録ばかりとは限らない。何が心を射るか分からない。普通、記録に残らない遠征の裏話が心を射るかもわからない。行動の記録のみならず、『気持ち』の記録母袋説だ。未知への切々たる『憧れ』の気持ちを残すべきではないだろうか。たとえ、わらわれても。戦後間もない人はこう考えていた、という記録は普通にはないし、一〇〇年、二〇〇年もたてばたいへん貴重なものとなる。

ＡＡＣＫの将来を、若い人々に託したいという言葉はよく聞く。とすると、現在の『年寄り』たち（我々以上）の仕事がそれに役だってほしいと思うのは当然だろう。それは『記録』に勝るものはない。

だから『紙』に『歌』にその記録を残さねばならない。どんなことが、青年の心を射るかわからない。だから、すべてを残さなければならない。ＡＡＣＫの未来は、若い心をもつ人々にゆだねられている。それらの心を、ゆさぶるようなものを残さなければならない。それは何十年もかかって、じわりじわりと効くものであってみれば、いますぐに、それをしなければならないものである。戦後の活躍を支えてきた年代が、次代に残す最後の仕事であろう。

若い心は我々年寄りの記録はかえって反撥するものであるという意見もある。いいではないか。そうかもしれない。しかし、反撥も『時間の関数』だし、それに『反撥もあるし賛同もある』というものである。だが『記録』がなければ、それは反撥も賛同もない。それは『無』に等しい。

コンロンを知っている人達に、どこで『コンロン』や『ゴビの原』の名を知ったか聞いてみた。みな三高の歌で知ったという。しかし、何故一九〇五年という早い時期に、三高生がコンロンの名を、ゴビの原の名を知っていたのだろうかという第二の問いには誰も答えを返さなかった。上の北村説を話したが、今のところ反論はない。

梅里雪山学術登山隊に対する会員および関係者個人募金（1996年10月23日現在）

高田方一郎	遠藤京子	伊藤宏範	吉越亘
蔵屋敷隆二	足立みなみ	宇野佐	中島暢太郎
西原宏	岡本克己	野村高史	岩坪昤子
福嶌義宏	永田龍	渡辺良男	甲斐邦男
山本武久	川瀬裕史	藤平正夫	利岡徹馬
末田達彦	林一彦	近藤良夫	桑原良雄
筒井芳則	中川潔（昭和28年卒）		堀内健二
高橋喜一	松本征夫	遠藤克昭	三輪佳宏
中山祐昭	杉山隆彦	前田琢磨	竹内佐郎
吉良竜夫	植原正行	窪田順平	岩坪五郎
中島道郎	江口和男	梅棹忠夫	村山弘治
中野正文	菊池卓郎	土生昶毅	安田隆彦
清水浩	山本紀夫	島田正彦	榊原雅晴
高野昭吾	中島伊平	遠山富太郎	藤村良
大森義次	吹田啓一郎	山口克	広瀬栄治
工藤秀雄	谷泰	松井敦男	藤本栄之助
井上潤	辻一郎	竹田晋也	松浦祥次郎
横山宏太郎	新庄忠夫	神園泰比古	野村哲也
上尾庄一郎	藤田陸奥麿	安藤元雄	古田耕作
大村祓	小林達明	前小屋端	清水久行
大澤忠嗣	森本奨	平井一正	堀了平
木村雅昭	日高敏隆	廣瀬幸治	寺本巌
伊藤寿男	宝田克男	今西秀明	高村奉樹
谷口朗	松本保博	近藤公夫	今川好則
月原敏博	酒井敏明	乙藤洋一郎	今西芳子
今西邦夫	岩倉哲男	瀬戸嗣郎	潮崎安弘
川口章	出水明	（敬称略、順序不同）	

以下次号

以上の他　古賀秀策、内田嘉弘、内田昌子（以上JAC）、井村裕夫（京大総長）、柯栄良三（元工学部長）、吉村公一（同志社大学山岳会会長）、村上隆造（株式会社キョウトムラカミ）の各位から寄付を頂きました。また会あてではなく斎藤隊長個人にとして、５人の会員から寄付をいただいています。またおひとり、会員で名前の不明な方から寄付をいただきました。（新しい住所なので名簿から検索不可能）。お心当たりの方至急連絡下さい。

以上会員および関係者111名、一般７名合計118名
現在募金総額625万円

編集後記

はからずもこの号はＡＡＣＫ批判特集になった。処女峰のほとんどなくなった現在、本号にあるような若い人の意見がでるのは当然である。若い人がＡＡＣＫにそっぽをむいた原因を卒直に反省して、今後のＡＡＣＫのありかたを論じたい。このままサロン化するか、変身して新しい目標をたてるか、ぜひ会員諸兄姉のご意見を寄せてほしい。

次号は二月末発行の予定です。ぜひ梅理雪山登頂成功で記事を飾りたいものです。（平井）

編集委員　平井一正、酒井敏明、薬師義美
発行日　一九九六年十一月二十五日
発行所　京都大学学士山岳会
京都市左京区北白川追分町
京都大学農学部岩坪五郎気付
製　作　京都市北区小山西花池町一―八
（株）土倉事務所